
彼女は確かめようのない寂しさで

谷川修一郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

彼女は確かめようのない寂しさで

【Nコード】

N4921C

【作者名】

谷川修一郎

【あらすじ】

恋人との待ち合わせをしていると、三つの銃声が轟いた。やってこない恋人は事故に巻き込まれてしまったのだろうか。

彼女は確かめようのない寂しさで

ビルに切り取られた狭く暑い空には眩いばかりに光り輝く太陽が浮かび、ぼくら地上の生物を焼き尽くすべく熱光線を浴びせつけていた。予定どおりに約束より十五分はやく到着したぼくは改札を抜けると、そそくさと広場を横ぎり、植えこみに生えるポプラの木陰へと逃れた。じつとりと汗の吹きでる腕をさつとハンカチで拭い、改めて広場を一望する。

夏休みであることに加え、日曜日だったこともあり、大勢の人間でごった返していたが、待ちあわせをしている人間はみな、ぼく同様に木陰やアーケードの軒下に隠れて気だるそうにしていた。

経験からすれば、美麻が到着するまで、あと二十分もあった。彼女はだいたい約束から五分後に何事もなかったかのように現れる。

「心配した？」

あまりにも無邪気にふるまうので、ぼくには一々遅刻をとがめるなんてことができないのだ。それでいて、ぼくが少しでも遅刻しようものなら、彼女はその一日というものを不機嫌そうに過ごすのだ。それでは、せつかくの休日もだいなしだ。待ちあわせをするときに約束の時間より早く到着しておくことに決めたのは、そういう事情のためだった。

美麻が言うには、自分の到着を待つ恋人は幸福な時間の中にいなければならぬのだそう。実際には熱光線の下で体中から汗をたらだらと流しながら待つ時間は苦痛でしかないのだが、彼女にはそういうったばかりの事情が見えないようだった。

まあ、良い。それを承知で一緒にいるのだから。ぼくは彼女のそういう自由奔放なところが決して嫌いではなかった。傲慢さもまた違うのだ。ただ人よりも少しだけ思い込みが激しいだけであって、お前に似ているんだ。

足もとに寄ってきた猫に僕は話しかけた。なんのことやら。不思議

彼女は確かめようのない寂しさで

議がる素振りもみせず、その猫はじつとぼくを見つめていた。それから線みたいに目を細くして、大きくあくびをする。

首輪をつけていないから、たぶん野良猫だろう。この辺の植えこみにはよくネズミが出るというから、それを掴まえにきたのかもしれない。でも、ネズミ捕りもできそうにないくらい彼も熱気にやられていた様子だった。

この暑さじゃあ、お前もたいへんだよな。

同情なんか要らねえよ。そんなことでも言いたげに猫は大あくびをした。しかし、次の瞬間には目にも留まらぬ速さで木陰から飛び出していった。何が起こったのか理解できず、心臓が止まったのかと思った。その瞬間、ぼくらの世界を動かしていた時間がなくなっただ。ありとあらゆる運動が静止し、喧騒が消えうせた。不気味なぐらいの静寂が街を覆った。

何かが破裂するような音が、パン、パン、パン、と三度繰り返して鳴り響いた。何の音なのだろうか。尋常ではない大きさの音だった。こう、胸に突き刺さるような……。

銃声だろうか。いや、まさか。

安全大国の日本の、この東京の真ん中で銃声だなんて。

でも最近、拳銃を使った犯罪をニュースで見たような気もした。どこで、どのような使われ方がされたのかまでは思い出せないが、たしか機動隊員が亡くなっていた。

いや、まさか。

ぼくは混乱していた。いちど整理する必要があった。何よりもず落ち着くことが肝心だ。この世界から時間が奪われる前にあった音というのは、三発の銃声と悲鳴だった。ホラー映画でよく耳にするような、恐怖に直面したときに女性が発するヒステリックな悲鳴だった。

女性？

ぼくはとっさに美麻の顔を思い浮かべた。

いや、まさか。

シャツを濡らしていた汗が、冷蔵庫にでも突っ込まれかのように冷気を帯びていった。凍えそうだった。

美麻……。

八月八日、つまり今日は美麻の誕生日だった。

ぼくらが付き合いだしてから、ちょうど三年が経つことになる。そんなわけで特別な日だった。ことあるごとに記念日をでっちあげる美麻にしても、特別な日のはずだった。気合の入りようもきつと尋常ではないだろう。その期待にそえるかどうかは分からないけれど、ぼくもそれなりに努力したつもりだ。昨日は寝ずに三冊の雑誌とインターネットを駆使して一日分のスケジュールを作り上げた。

美麻の性格を考えれば、そんな予定表、一目見てすぐに忘れて去られてしまうことぐらい分かりきっていたというのに、もともと几帳面な性格だったせいか、ぼくはミスのないよう細部までしっかりと練り上げた。

その予定表によれば、美麻はもうじきやってくるはずだった。時間さえ動き出せば。

ぼくの背後からそっと近づいてきて、耳元で例の言葉を囁くのだ。「ねえ、心配した?」

いつものことながら、ぼくは驚いて思わず彼女から逃れるように前へと出る。その姿が美麻には可笑しいらしく、彼女は子供みたくに笑い声をあげる。

「驚きすぎだよ」

そんなことはない。背後からいきなり囁かれたら誰だって驚くのが普通だ。でも、そんな正論にも彼女は耳を貸さない。

「ちゃんと心配してくれてた?」

言わされているような形だが、ぼくは不貞腐れたように、したよ、と応える。その言葉だけで彼女は満足なのだ。なぜならば、悔しいけれどぼくが本当に心配していたことを彼女は聞く前から知っていた。

彼女は確かめようのない寂しさで

たのだから。

「それで今日はどこへ連れて行ってくれるの？」

メインイベントは美麻がずっと前から行きたがっていた夕方からのプラネタリウムだった。でも、ぼくはそのことをまだ彼女には知らせない。お楽しみだよ、美麻の行きたがっていたところだ、と仄めかすだけに留める。

「楽しみにしちゃおうかな。でもハードルを上げちゃっても大丈夫なの？」

と美麻はぼくを挑発する。

無論、大丈夫だ。計画に抜かりはない。ぼくは自信をもって美麻にそう言う。

「ほんとに？」

ほんとに。

「そこまでいうなら、しつかりよろしくね」

美麻はぼくの腕を取って歩き出す。

暑いので本当はべたべたするのは嫌だったが、あまりの強引さに文句をいう暇も与えてはくれない。ぼくが以前買ってあげたスカイブルーの肩だしワンピースに純白のミユールという、いかにも夏らしい服装だ。普段スニーカーばかり履いている美麻は、少しだけ歩きづらそうだ。

「それで、どこに連れて行ってくれるの？」

人でいっぱいスクランブル交差点を横断しながら、美麻はぼくに尋ねる。

「昼までは少し散歩しようよ。五年坂の方をさ。」

「五年坂、懐かしいね」

東京に五年坂などという地名は存在しない。ただ、ぼくらがそう呼んでいるだけに過ぎなかった。宮下公園前の交差点から、青山の方へ少しはいった辺りにある、こじんまりとした雑貨店が軒を並べるゆるやかな坂道だ。

三年前、ぼくはそこで彼女に告白というものをした。思い出すの

も恥ずかしいのだが、そのときにぼくが口走ったのが、五年後の自分たちという歯も浮くような台詞だった。まったく何て馬鹿なことを口にしてしまったのだろうか。おかげでこの三年という間に何度五年という言葉在美麻の口から聞かされたのか分かったものではない。

嬉しかったというのも分かるのだが、もう少し自粛してもらわないと心臓に負荷がかかって寿命がいくらあっても足りない。

あの日からずっと拒み続けていた五年坂だが、ようやく再訪する気になったのは他でもなくぼくらの未来に対する決断のためだった。学生だった頃のぼくとはもう違う。会社勤めもはじめて、それほど多くはないけれど貯蓄もできた。そういうわけだ。

鞆の中にはエンゲージリングを忍ばせてある。それを渡すタイミングだって、もうすっかりと計画済みだった。

「ねえ、この店に入ったのを覚えている？」

そういつて、美麻はオリエンタルな雑貨屋へと入っていく。赤やら緑やらの原色に染まった小石のアクセサリーが仄暗い店内のいたるところに陳列している。美麻はそれを手にとったり、転がしたりしてじやれている。そして、ときたま思い出したかのようにぼくへと意見を聞いたりするのだ。

「ねえ、これ似合うかな」

もちろん、彼女が何をつけていても、ぼくは似合うと言う。

そんなことを繰り返している間に、ぼくは強烈なお香や香辛料の匂いと、優しい照明とで軽いトリップ状態になる。

「三年前は、たしかこれを買ったのよね」

そういつて美麻が手を伸ばしたのは、実に怪しげな琥珀色の小さなキーホルダーだ。なんだっけ。ぼくはぼんやりした頭でそれをじつと見入る。琥珀色の樹脂の中には蚊が閉じ込められている。

それは一万年前の蚊のレプリカだった。

そのレプリカを三年前のあの日、美麻は買った。それからしばらく

彼女は確かめようのない寂しさで

くの間、彼女は接合部を取りかえてそれを携帯電話のストラップとして使っていたのだが、いつの日からかその姿を見なくなっていた。そういえば一度、観察させてもらったことがあった。

樹脂の中で固まっている蚊はともリアルで本物と見紛うほどだったが、ぼくにはその価値がいつこうに分からないのだった。なぜならば、一年前の蚊のレプリカといっても、夏の夜に嫌らしい羽音をたてながら耳元を掠め飛んでいく、あの蚊となんら違いが見当たらないのだから。

「ロマンのない人間だなあ」

美麻はそういつて嘆いていたが、その意見には同意せざるを得ないだろう。

三年前のあの頃、ぼくにはまだ美麻のいうところの「見えざる価値」というものを受け入れるだけの余裕がなかったのだ。生まれてからずっと身の回りの些事を片付けることに忙殺されていたぼくにとって彼女の考え方は、鎖国していた頃の江戸にやってきた黒船よろしく、奇妙奇天烈なこと極まりなかった。

「良い？ 目に見えるものばかりが真実ではないの。これは蚊のレプリカではなくて、時間そのものを具象化したものなの」

彼女は冗談めかすこともなく大真面目にそう言っていた。

曰く、絵を見るのではなく絵を描くに至った作家の感情を、あるいは文章を読むのではなく文章を描かずにはいられなかった時代の行きつまり具合を見ると言った。それが芸術における「見えざる価値」である、と。そして、そういう「見えざる価値」が充満した状態のことを彼女はロマンチックと形容するのだった。

歴史が見えるね。

「おっ、分かっているじゃないの」

美麻は満足そうに微笑む。

思い出と戯れるように、ぼくらは店内の小物を物色しては冗談を言いあうのだ。そのうちに何もかもが歴史の一部分のように思えて

彼女は確かめようのない寂しさで

くる。しかし、一過性の時間のなかで思い出が現在に適うわけがなく、しばらくすると美麻は屈服する。

「喋りすぎて、のど渴いた」

それを合図にぼくらは店を出るだろう。

次に入るのは、三軒となりのカフェだ。白塗りのテラスにも席はあるのだが、この暑さのなかで休憩するには向かない。ベルのついた押し扉をくぐると、板張りの店内はクーラーが効いていてひんやりと冷えている。店員以外の人影はなく、貸しきり状態だ。

真っ白いエプロンをつけた女性がショーケース越しに爽やかな笑顔で迎える。

ガラス張りのショーケースの中では照明受けて美味しそうに輝くショートケーキやミルクフィードなどのケーキ類、それからプリンアラモードや焼き菓子も並んでいる。

「どれも美味しそう」

美麻はのどの渴きのことなど忘れてケーキのとりこになる。

この店はガトーショコラとモンブランが特に美味しいんだって。

昨晚調べたばかりの情報をそれとなく教えてあげると、美麻はさすが二つとも注文する。それとアイスコーヒーを二杯。

等身ほどもある大きな窓の向こうには、先ほど入り際に見たテラスの席が臨めた。

美麻は壁側で陽のよく当たる席に陣取り、ガトーショコラとモンブランをじつと観察しはじめ。手をつける前に、その形をしっかりと頭に叩き込んでおくのが彼女の決まりだった。あとでもし同じものを作ろうと思ったときに役に立つように。でも、よくよく考えれば美麻がお菓子を作ったことなど一度もなかったように思う。

窓ガラス越しに差し込む陽光は、変わらず強い。クーラーが効いている分だけ、外に居るよりよりはだいぶましだったが、それにしても酷い暑さだ。八月八日というのは立秋であり、暦の上ではもう秋のはずだというのに、まだまだ暑さが引くような気配はなかった。そういえば、ぼくが昨晚作り上げた完璧な計画書によれば、昼食

のことを考えて、この店ではケーキを食べないよう注意をするはずだった。どうしてだろう、これはあくまでシミュレーションのはずだった。シミュレーション？ 昨晚飽きるほど繰り返し返したはずなのに、どうしてぼくはまた思考錯誤をしないおさなければならぬのだろうか。計画書は完成しているはずだ。

いや、まさか。

そうだ、ぼくは今、駅前の広場で美麻を待っているところなのだ。銃声と悲鳴があつて、それでもし被害にあつたのが美麻であつたら……、そんな不吉な予感に襲われて、時間を進めるのが嫌になつてしまつたのだつた。

でも、ぼくが望むにせよ、望まないにせよ、いずれ時間は進んでしまつだろう。ぼくの気持ちでどうにかなる問題ではない。スーパーマンでも、科学者でもないのだから、過ぎ去つた時間を取りもどすなんてことはできないのだ。

「ねえ、どうしたの？ 気難しそうな顔しちゃつて」

美麻はガトーショコラをフォークですくつて、それを口に入れた。「うん、甘くて美味しい。早く食べないとなくなつちゃうよ」

実はこの後に、レストランを予約してあるんだ。

「もう頼んじゃつたのに食べるなつていうの？ 目のまえの幸せを逃すものは、あとで後悔するのよ」

後先のことを考えない人間だつて、いずれ後悔するよ。あのとき少しだけ我慢しておけば良かったのになつて。

「そのときはそのとき」

無茶苦茶だなあ。

そうは言いつつも、ぼくもフォークでモンブランを突付いてみる。これが思ひのほか美味しくて、今度はガトーショコラにも手が伸びてしまう。

「ね、美味しいでしょ？」

確かに。

この時間がいつまでも続いていれば良いのにと、ぼくは本気で思

っていた。

でも、やはり今という瞬間は一過性のものなのだ。どんなに少しずつ食べたとしても、ケーキはいずれ無くなる。形あるものは、いずれ失われるのだ。それはぼくや美麻にしてみたって同じことだ。生きている限り死は付きまとうだろう。でも、それがわざわざ今日を選んで訪れることもないではないか。

会計時、美麻はここから満足している様子で、先ほどの店員に心からの感謝の意を伝えていた。本当に美味しかったです。絶対にまた来ます、と。

予約をした十二時半まではまだ少し時間があったが、僕らは店のある表参道の方へ向かうことにした。徒歩で二十分ぐらいの距離だ。それぐらいなら五体満足なぼくらは歩くことができた。うとうと歩いてみると明治通り沿いの店舗に美麻が吸い込まれていたりする。彼女がいないことに気付かないまま、振り向きざまぼくは知らない人に、なあ、そうだろ、などと同意を求めて恥をかく。OLは、そうですね、と言わんばかりの苦笑いを浮かべてぼくの脇をすり抜けていった。

美麻はもう店の中だった。まったく、一言ぐらいかけてくれれば良いのに。愚痴をこぼしつつもぼくは彼女を追った。美麻は少しでも目を離すと、どこか遠くへ行ってしまう。置き去りにされたくないければ片時も目を離してはならないのだ。

まずぼくを迎え入れたのはカラスの羽を思わせるほどに真っ黒いウェディングドレスだった。綺麗といえば綺麗なのだが、バージンロードを歩く花嫁にこれを着せるのはいささか問題があるように思う。入り口の真正面に展示されているそのドレスをよけて店内を進むと、その暗黒空間ぶりにぼくは気が退けて来る。その店で売られている品は何もかもが黒かった。ひと昔まえに流行ったビジュアル系のバンドの人たちが着ていたような、オカルトめいた衣装ばかりが並んでいた。ボンテージや拘束具の類が実際に売られているところにも驚きだが、手錠や拳銃を模したアクセサリーについている、

彼女は確かめようのない寂しさで

今流行の！ という手書きポップにも舌を巻いた。そんなものを付けている人間がどこにいるというのだろうか。

などと思っていたのだが、手錠のアクセサリーをつけている人間はすぐに見つかった。

「似合う？」

美麻の手首には、例の手錠のアクセサリーがしっかりとハマっていた。

それを見てぼくは言葉を失う。

「これ、流行ってるんだってさ」

そんな馬鹿な。

嫌がるぼくの手首に、美麻は無理やり手錠の片側をはめる。

「はい、逮捕しました」

それはもう満面の笑みを浮かべて。

ちゃんと取れるんだろっな。

ぼくは念を押すが、美麻は自信なさげに、たぶん、と答えるだけだった。それから、手錠をガチャガチャといじりだしたが、一向にはずれそうな感じがしない。熱中する美麻の額には薄っすらと汗が浮かんでいた。いや、そこまでムキになることはないのだが。

なあ、店員に聞いたほうが早いんじゃないか？

そう提案すると、美麻は開眼という言葉をそのまま体現したかのような表情をして、人差し指でぼくのことを指す。

「よく気がついたね」

ぼくらは手錠に繋がれたままの間抜けな格好で店員に事情を説明する。ああ、また馬鹿ツプルが捕まったか。そう言わんばかりに店員は笑いを押し殺している様子だ。手錠はボタン一つで取れる仕組みだったが、そのボタンというのが上手い具合に塗装されていて気付きにくくて、どのカップルも店員に助けを呼ぶのだという。

申し訳なかったので、ぼくはその手錠のアクセサリーを購入することにする。あまりリーズナブルな価格ではなかったが、美麻の喜びようを考慮すれば良い買い物だったのかもしれない。このアクセ

サリーが、今流行の！ と書かれるぐらいに売れる理由も分かったような気がする。

でも、一つだけ約束して欲しい。それを付けるのは家の中だけにしてくれよな。

店を出るなり、さっそく手首にはめようとしている美麻にぼくは釘をさす。いくらなんでも、その格好に手錠は不相応だからと理屈をこねくり回したのもあって、なんとか彼女を説得することができたが、少し不満そうだったのは否定できない。だから、ぼくは自分がもつとも嫌いな手法で彼女に止めをさすことにする。

ほら、手錠を付けていなくたって、ぼくには見えない手錠がついているんだからさ。

見えざる価値さえ逆手にとってしまえば美麻はもうマタタビを嗅いだ猫だった。

「それもそうね」

単純だとは思いつけれど、単純であるということが必ずしも悪ではないというのがぼくの持論だった。少なくとも美麻のなかにある単純な部分は、ぼくの心を安らげてくれる。猫科の女性である美麻は謎に満ちているけれど、何もかもが謎で構成されているというわけでもなかった。

予約してあった店に到着したのは十二時半ちょうどだった。自由奔放にあっちこっちの店を回る美麻を誘導するのは楽ではなかったけれど、ぼくは良くやったと思う。さきほど食べたケーキも、この一時間ほどの散歩ですっかり消化できたようで腹も減っていた。

純白のクロスに覆われたテーブルには、ポインセチアの花の生けである青ガラスの花瓶と、フォークやナイフの入った食器籠が乗っている。アンティパストとサラダだけが決まっっていて、パスタとデザートを選択できるというランチだけのコースメニューだった。美麻はオクラや水ナスなどの夏野菜をふんだんに使ったトマトソースのを、ぼくは海老クリームのパスタを注文した。

「今日はずいぶん豪勢だね。ポーナスけっこう出たの？」

これぐらい、訳ないよ。とぼくは落ち着き払って余裕ぶる。

まあ言われてみれば確かに、気合の入れようは例年の比ではないかもしれないけど。でもぼくにしてみれば、今日は一世一代の芝居を打たなければならぬ特別な一日なのだった。気合を入れるなどという方がどだい無理なはなしだ。

「それにしても、見えない手錠とは恐れ入りました」

ぼく自身も恐れ入っていた。いくらその場所を治めるためだという理由があつたのだとしても、少し悪乗りが過ぎた。思い返せば、美麻と出会つたことでぼくの人生は大きく変化した気がする。物の捉え方や感じ方が変わったし、ロマンというものを理解できるようになった。川面に映りこむ夕陽や風に舞う色あせた枯葉の美しさに気付かせてくれたのは他の誰でもなく美麻だった。珍しいもの、奇妙なものへの関心を隠さない彼女は、あつちこつちにぼくを連れまわし、普通に生きていくぶんには知らなくても済む、多くの不思議について教えてくれた。ときに半強制的であつたりもしたけれど。だから、見えない手錠という比喻はある意味でとても的を射ていた。

的を射ていたけれど、わざわざ口に出して言ってしまったことがぼくには、どうしようもなく恥ずかしかったのだ。

「ちよつと嬉しかったよ」

光栄です。

それからぼくらは、運ばれてくる料理を一つ一つ丁寧にたいらげていった。美麻はワインがあつたら最高ののにと不平を言っていたが、アルコールの摂取は厳禁だった。メインイベントで居眠りなんてされたら、また別の機会に特別な一日をやり直さないといけない。予約時に誕生日だと伝えてあつたので、デザートが運ばれてきたときに店員らがハッピーバースデーと大合唱してくれる一幕もあったが、何よりも美麻が感動を示したのは、ティラミスに突き刺さつたホワイトチョコプレートだった。その人差し指の爪ほどしかない板には、髪の毛で書いたような細かい字が綴られていた。

彼女は確かめようのない寂しさで

「こんなに小さな文字を書けるなんてすごい」

帰り際、どうしても直接御礼を言いたいと頼みこんでパティシエールを呼んでもらった。彼女は東欧人らしく褐色がかった肌の色をしていた。可愛らしい笑顔だったが、日本語はあまり得意ではないようだ。美麻は思いつく限りの言葉で賛辞を並べていたけれど、パティシエールはただにこやかに、ぎこちない日本語でありがとうございますと繰り返すだけだった。

美麻は止めなければ何時間でも続けていそうな勢いだった。

さあ、もう良いだろ。彼女、迷惑かもよ。

「はい、はい」

まったく何も分かっていないんだから、とでも言い出しかねない口ぶりだった。

店を出たばかりは、皇居の向こうへと回る予定だった。上野か東京あたりで時間を潰してから、夕方には水道橋へ行く。プラネタリウムの開演は六時だった。

「ねえ、行きたいところがあるの。着いてきて」

これだ。せっかくの予定も、美麻が相手では紙きれ同然。まあ、いつものことではあるが、果たしてメインイベントに辿りつけるのだろうか。ここでネタをばらしてしまえば、彼女はきっとプラネタリウムのことを優先させるだろう。でも、それではせっかくここまで隠し通してきたのが無駄になる。

もう少し様子を見ることにしながら、ぼくは美麻のあとを追った。彼女が向かったのは原宿駅だった。それから切符を二枚買って、一枚をぼくによこした。

「食事のお礼におごるよ」
安くついたもんだ。

乗り込んだ山手線の車両には喪服を着た人たちが大勢いた。哀しみをこらえることができずにハンカチを目に当てている婦人たち、怒りに目が血走っている中年の男たち。すすり泣きと慰めの声が車内アナウンスの後ろに小さく聞こえる。

美麻は毅然としたまま黙りこくっていた。

ぼくも気圧されて、一言も発することができなかった。

この雰囲気のかなどこへ行くというのだろう。ぼくは次の駅にでも一度下車して、隣の車両なりに乗り換えたいと思っていた。だから、停車したときに美麻が降りるよ、と口にしたのは本当に嬉しかった。

でも、降りてからすぐに体中が凍りついた。

渋谷。それは今朝、待ち合わせをした駅だった。嫌な記憶がフラッシュバックを始める。見えない恐怖が、そつとぼくに真実を思い出すよう囁く。お前がいる場所はここではない。お前が今いる場所は

美麻は一言も語らずに歩いた。改札を抜けて、八千公前の広場を目指し。

なあ、美麻。ぼくにも行きたい場所があるんだ。

「プラネタリウムでしょ？」

彼女は当然のことのようにさらりと言い流した。

なんで、そのことを知っているんだよ。

「なんでって。だって私はあなただもの。あなたの中にある美麻のイメージの複合体。それが私だよ。そして、あそこで凍りついているのがあなた」

ぼくがいた。暑さから逃れるようにして入った木陰。足元には猫。それを確認した瞬間、世界からはまたもや時間が奪われた。ただぼくと美麻だけが自由だった。

「ねえ、どうするべきだと思う？」

分からない。どうすれば良いんだ？

「分かっているはずよ。言ったでしょ、私はあなたなんだから」

そう、分かっているんだ。何をすべきかなんて。でも怖いんだ。

「どうして？」

大切だから。失くしたくないから。

「彼女はきつとその言葉を聞きたがっていると思うわ」

君が言ったって説得力に欠けるよ。君はぼくなんだから。

「それもそうね。あとはあなた次第」

そして美麻は消えていった。霧のようにその輪郭が薄れていって、終いには綺麗さっぱり見えなくなった。

美麻。

波紋となったぼくの叫び声が世界に時間を取り戻させていく。色あせたまま凍り付いていた渋谷が、色鮮やかに染色されていった。元通りの、汚らしさが街に舞いもどる。人間や排気ガスの臭いが、ツンと鼻をつく。あっちこっちの街頭ビジョンからは各々の音声をかまびすしく響かせあっていた。

美麻、君はどこへ行ってしまったんだ？ たとえ君がぼくの分身であってもかまわない。声を聞かせてくれ。姿を見せてくれ。

ぼくは彼女を追い求めて渋谷区じゅうを走った。五年坂を、道玄坂を、宮益坂を、坂という坂を。終いには青山の方まで。しかし、どんなに探し回ったところで美麻が見つかるわけがなかった。彼女がいる場所を知っていて、ぼくはそこを避けていたのだから。

エンゲージリングの入った小箱を握りしめて泣いた。一人で、人目も気にしないで。行き交う人びとは、ぼくを避けるようにして歩いていた。

どうしてこんなことになってしまったのだろうか。

嘆いているだけでは先へ進むことはできない。人間は脆くて儂い存在で、ぼくだっていつ死んでしまってもおかしくはないだろう。街には危険がいっぱいだし、警察の前を通りかかれば、その日のうちにどれだけの人間が死んでいるかを確認できる。ニュースの中でしか起こっていないものだと思いついていた発砲事件だって、もはや日常生活のすぐ側で起こりうるそういう時代になった。

安全地帯なんてものはない。だから、いつ死んでも悔いのないような生き方をしようという、そういう考え方には同意する。でも、それを実行できるかどうかは別の問題で、きつとぼくはいつ死ぬとしても、そのときにはきつと後悔を惜しまないだろう。

彼女は確かめようのない寂しさで

どんなふうに住きたって後悔はなくならない。

だからもし後悔する可能性がひと欠けらでもあるとするのなら、
ぼくは時間を止めたまま自分の殻に閉じこもっていたい。美麻の生
死が曖昧なままであれば、ぼくの悲しさや寂しさだつて曖昧なまま
だ。でも、本当にそれで良いのだろうか、美麻はいま、どんな気持
ちでいるのだろうか。もし撃たれたのが彼女で、まだ少しでも息が
残っているのならば、ぼくに会いたいと思っっているのではないのか。
その気持ちを、ぼくは蔑ろにしていた。

不甲斐なさに胸のうちが圧迫する。

街のどこかで、心配げに猫が鳴いているのが聞こえた。

一過性の時間。その中にぼくは立っていた。木陰、猫、待ち合わ
せの時間。銃声のすぐ後。時間のうねりが、ぼくを八月八日の午前
十時ぴつたりと連れ戻した。どうするべきかは分かっているつもり
だ。そうだ、歩き出さなければ。

ぼくはゆっくりと最初の一步を踏み出す。銃声のあつた方へ向か
つて。野次馬たちをかきわけて地下へ降りていく。その足は絶えず
震えていた。

なあ、美麻。君のいない場所で生きていくなんて退屈だよ。

「ねえ、心配した？」

彼女は確かめようのない寂しさで

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4921c/>

彼女は確かめようのない寂しさで

2009年3月24日10時32分発行